

## 身はここにあれども

### ルカ福音書15:25-32

- 15:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。
- 15:26 それで、しもべのひとりと呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、
- 15:27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』
- 15:28 すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。
- 15:29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。』
- 15:30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』
- 15:31 父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』
- 15:32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』

### 【祈りながら考えよう】

- (1) 兄息子は（真面目な働き者、いい息子）と思われていた。父親の心と1つでしたか。
- (2) パリサイ人や律法学者がキリストを排斥したのはなぜですか。
- (3) 神様は、私たちを「しもべ（奴隷）」として扱うお方ですか、それとも「子」として扱うお方ですか。

### 【解 説】

#### （1）ほめられ者の兄息子

ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。  
この御言葉から、兄息子の方は、大変真面目な人であったことがわかる。家では弟息子が帰ってきたというので、大宴会が開かれている。ところがこの兄息子は、今日も畑にいて、日が暮れるまで働いていた。《兄息子は畑にいたが》、これがこの兄息子の毎日の生活を表現している。「働くことしか知らない人」、この兄息子は、そういう存在であった。性格的に言うと、弟息子は非常に陽気で、自由勝手にふるまって、しばしばはめをはずす。そして放蕩三昧の道に踏み込んで行った。  
兄息子は反対に、判で押したような毎日をおくる人であった。働いていなければ心が落ち着かない人。一見すると、「弟の方は（でたらめ）だが、兄は真面目で働き者。親によく仕え、親を困らせることがない。いい息子だ」と思われている。しかし、はたしてそうであったかどうかということが、今日の（たとえ）の目的である。

#### （2）親の心と1つであったか

ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。  
それで、しもべのひとりと呼んで、これはいったい何事かと尋ねると（25-26節）  
この兄にとって、お祭り騒ぎは、性に合わないことであった。家に帰ってきたが、中に入ることができなかった。そこで、ひとりのしもべを外へ呼び出して、「いったい何事か」と尋ねた。そこでしもべは答えた。  
しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』（27節）

しもべはしもべなりに、ご主人の喜びにあずかって、自分も喜びに満ちて答えている。家中をあげての喜びの中に入って、自分自身も嬉しそうに兄息子に伝えている。

それを聞いた時、兄の心に怒りが起こった。その内容を聞いた時に、この家に入れなくなった。「すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかったそれで、父が出て来て、いろいろなだめてみた」とある。強い反発が起こった。その気配を父は奥にいて察した。そのことをしもべが取り次いだとは書いていない。怒っている兄息子のところへ、父親の方から出て来た。

父親にとって、弟息子もかわいいが、兄息子の方もかわいい。性格は違うが、親にとっては、いずれも愛する子供である。だから何よりも兄息子と、この喜びを共にしたいということが、弟が帰って来た時から、父親の心にあった。兄息子が畑から帰ってくるのを待っていた。兄の帰りを待って入口を気にしていた。共に喜ぶためである。弟息子に対すると同じように、兄息子に対しても、親心を注いでいる姿が見られる。《父が出て来て》とある。親の方では、ふたりの息子に対して差別なく、同じ愛を持っていたことがわかる。

兄息子にとっては、父親の弟息子に対する扱い方が不公平に思えた。「父は弟に対して甘い。父親はもっと厳しく戒めるべきではないか。それを言いなり放題に、やりたい放題のことをやらせ、あげくのはては、財産を分けてやってしまった。そんなことをすれば、あの弟はいよいよ思う存分自由に遊ぶ道へ突き進んで行くにきまっている。それがわかっていながら、それをせがまれるままに分けてやって、結局思った通りに放蕩三昧に全部使い果たしてしまったではないか。困ったあげくに、のそのそ帰ってきた。そんな息子を迎えたといって喜んでいる父の姿が情けない」と。

この世的な見方で見れば、兄息子の批判は正しい。しかしそれは表面上のこと。父親は、兄のそうした批判のように、弟に対してただ甘いだけで、兄の方には厳しくしていたのか。そうではない。

#### （3）ねたみと自己義認と自己憐憫

兄息子は父親の態度に我慢してきた。しかし事ここに至っては、もう我慢できない。今までは心の中だけで批判してきた。こういう道徳的で、真面目と見える人は、自分の感情を外に出さない。自分の道徳的基準で、自分もそれに合わせてゆこうとする。それからはずれたら自分が気持ちが悪い。毎日判で押したような歩み方をする。

今まで父親のことも、「弟には何でも甘い」「弟ばかりにあんなにして、自分にはどうだ」というふうに、弟と自分を見比べて批判していた。それを外には出さなかった。しかし、ここに至った時、それが爆発して出てきた。

ここで、兄息子の心の実態があらわにされた。ここに見られる兄息子の言い分から、父親に対する心の態度が、どういふものであったかということがよくわかる。

しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。』

それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』

この言葉によって、強く感じるものは、弟に対するねたみ、嫉妬心である。「あんなにやりたいことをやらせていながら、それでいて帰ってくれば、父親は手放して喜んでくれる。自分はそんな扱いはされたことはない」という。ここに、ねたみ、嫉妬心がある。嫉妬心には、必ず同時に、自己義認、自分の正しさを主張することがある。

「私はこんなにやっているのに、同じ息子なのに、弟ばかりが、かわいがられている。」「私が」というものが強く主張されている。

さらにもう1つの心が伴う。自己憐憫である。「それなのに、私はこんな扱いを受けて情けない。かわいそうな私よ。弟ばかりが、かわいがられて、私はこんなによくやっているのにかわいがってもらえない。なんて哀れな者だろう」と自分に言い聞かせている。ねたみと自己義認と自己憐憫、これは一緒に起こる。

#### （4）キリストを排斥した理由

こうした気持ちは、自分の方ばかりを向いているところから起こる。父親の方に心を向けて、父親の心を受けていれば、こんなふうには思わない。

兄息子は、一見、父親に従っているようだが、実は自分の心に持った道徳的な基準に従っていた。真面目だ、親に対して本当に従順だ、家業によく精を出す、本当にいい親思いの子だ、と思われていたが、実は従っているのは親ではなく、（自分の道徳的基準）に忠実であった。

当時のパリサイ人や律法学者たちは、そういう典型的な存在であった。神様に従っているようだが、そうではなくて、自分の心の道徳的基準に忠実であった。

だから、神様の現れである神のひとり子キリストがおいでになったのに、彼らは自分の基準に合わないということでこれを排斥した。心底、神様に向かっていけば、神様の心に触れていけば、そんなとんでもない間違いをしなかつたはずである。

#### （5）神様の心を心としない自己主張

##### ①カインの場合

カインは神様に対して一生懸命努力して勤勉に働いているようで、実は自分の心に対して勤勉だった。神様の心にはなかった。カインは、自分がこんなに努力して持って行く、このさげ物を神様は必ず受け入れてくれるはずだ。弟のようにあんな楽な仕事で得た物を持っていくより、自分がこんなに苦勞して自分の手でやったこの働きを、「ああ、よくやった、カインよ。お前は働き者だ。いい物を持ってきた、うれしいぞ」と言ってくれるにちがいない、と決め



てかかった。

神様の心で判断しないで、自分の心で判断して持っていった。それが神様に受け入れられなかった。その高慢さ、神様の心を心とせず、自分の心を先立てしていた。それが神様がカインのささげ物を受け入れられなかった原因である。

なにも土からとったものがいけないのではない。羊を持って行ったら、いいのではない。神様の心を心としない、(自分の心)を「神」とし、自分の心に仕えていたその結果である。

そこで「ああ間違っていた」と神様の方を向けばいい。悔い改めればいいが、ねたみは逆に強い自己主張となり、自己義認となる。私はこんなにやっているのに、という自己義認となる。そして、こんな扱いを受けて私というものはかわいそうだ、と自己憐憫が出てくる。ねたみと激しい怒りとに駆り立てられて、ついにアベルを殺すということになった。

## ②兄息子の場合

この兄息子の場合も同じである。「長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません」。私はこんなにやってきたのに、どこに私の落ち度がありましたか、と一生懸命自己義認をしている。自分の義を言い立てている。「それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか」。

私はこんなに働いてきたのに、「その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません」と言って親に文句をつけている。父親はけちで、この兄息子をただ働かせるだけ働かせたのか。そうではない。もしそうだったら、それは親の方が悪い。それこそ、えこひいきである。

親の方から「友だちと一緒に、たまに仕事を忘れて、何もかもいっさい忘れて、思いきり底抜けに遊びなさい」と勧められても、この息子はできる存在ではない。毎日判で押したように働いていなければ落ち着かない。「こんなに私はあなたのためにやってきた、親のために働いてきた、家のために働いてきた」。そういう言い分になって、自分の義を言い立てる場になってくる。

この言い分は子供としての言い分ではない。これは(しもべ)の言うことである。「ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません」。父親と同じ屋根の下で、体はそこにありながら、心は息子の位置にいなかった。心は父親からはるか遠くに離れていた。結局は親に対して放蕩息子と同じだということである。

兄息子は体は家から離れたことはなかったが、心は離れた放蕩息子であった。全く親子の関係を破っていた。それはどういう関係であったのか、主人と(しもべ)の関係である。

この兄息子の方はいつでも、ああ今日も働いた、と自分で満足している。そして、自分はなんて親に対して、この家に対して忠実な存在だ。あんな弟みたいなやつとは違う、ということで暮らしてきた。しかし、その心は真に親に向かう(子供の心)ではない。身はここにあれども、心においては、親から全く失われた子供であることに変わりはない。放蕩息子であることに変わりはない。

## ③兄息子は誰にたとえられているか

この兄息子の姿は誰か。当時のユダヤ人の宗教的指導者、神に最も熱心で忠実だと自他共に認めていたパリサイ人、律法学者たちである。自分たちはこんなに、だれよりも神に忠実だ。律法に忠実だ。そして熱心だ。人が遊んでいる時も、自分はいつでも律法の行為に励んでいる。神から片時も離れることなどない。

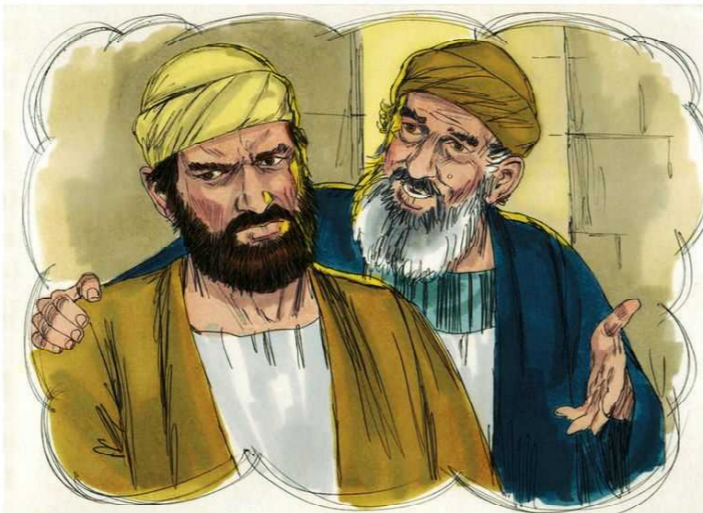
しかし、神様の心に触れていない。神様に向かっていない。だから、取税人、罪人、律法を踏み外している者、放蕩息子のような者たちが、救われたとか、神様の恵みの対象だ。愛の対象だなんていわれることは、どうしたって承知できないことであった。

## (6)「子よ」と呼ぶ

兄息子は親に対して、けちな親だと思っていた。親の方はけちではなかったが、息子の方でそんなふうに考えていた。ここでそのことがあらわにされた。いかに弟を憎み、父親を憎んでいるか、憎々しい言葉でわかる。

それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。

(弟)と言っていない、《あなたの息子》である。この言葉で、親思いの、親のために忠実に家業に一生懸命励んでいるかのように見えたこの息子は、実はそうではなかったということがわかる。心の放蕩息子で



ある。「身はここにあれども、心ここにあらず」。親にとってこんな悲しいことはない。

しかし父親は、放蕩息子に対して、愛をもって向かい、受け入れたように、兄息子を受け入れている。父親の言葉がこれに続く。

父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』

ここで「子よ」と呼んでいる。この《子よ》という呼びかけは、特別な呼びかけである。兄息子が《あなたの息子》と言ったのに対して、父親は、兄息子に対して《子よ》と呼んでいる。

日本語ではどちらも《息子、子》であるが、原語のギリシャ語は違っている。兄息子がふてくされて《あなたの息子》と言った時には、「υἱός (フィオス) 英語の「son」、普通の(息子)という呼びかけである。

それに対して父親が《子よ》と呼んだのはこれではない、「τέκνον (テクノン) これは(子)ということである。「英語/child」(かわいい子)である。

(息子)と言う時と、(子よ)と言う時と、そこに心のありかたが異なる。息子という普通の呼び方ではない、(かわいい子)と言う。年は三十でも四十でも、親にとっては、(愛らしく、かわいい子)である。

そういう気持ちの《子よ》である。だからこの《子よ》という呼びかけで、父親の心がうかがえる。父親の方は腹を立てないで、その兄息子に対して、なお親として語る。それが《子よ》というこの呼びかけに込められている。

私たちが、どんなにひどい罪に転落しても、なお、神様は愛をもって《子よ》と呼びかけていてくださる。だから、どん底からでも、悔い改めて、立ち帰ることができる。それが神の愛である。

## (7) 私のものは、全部おまえのものだ

《子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ》

おまえは子やぎ一匹くれなかったというが、考えてみなさい。おまえは私と一緒にいるではないか。私のものは、みんなおまえのものだ。おまえが朝から晩まで畑で働いてきた、それは、みんなおまえの財産をふやすために働いたことではないか。私のものは、全部おまえのものではないか、と言っている。

《子よ》と、呼びかけているこの呼びかけにおいて、《あなたはいつも私と一緒にいる》と言っている。これは「子供としてあなたは私と一緒にいるではないか、あなたは私の子ではないか、この家にある一切切切みなおまえのものではないか」ということである。

次男の方には取り分をやってしまっ、しかもそれを使い果たしてしまっている。残っているのは兄息子がもらう分だけである。まだ父と一緒にいるからそれは具体的にはもらった形になっていなくても、結局は自分のものである。

お父さんの子としてお父さんと一緒にいれば、当然父のものはその息子のものである。だから、(問題)は(父と子の関係)にあるということだけである。親と子が1つであれば、その持ち物も1つになる。《私のものは、全部あなたのものだ》、全部与えられている。

これが私たちと神様との関係である。私たちがイエス・キリストによって信じる神様は、この父親のこの姿において、私をいつも(子よ)と呼んで下さるお方である。

おまえは私と一緒にいるではないか、それならば、わたしのものは、みんなおまえのものだと、私たちに対して言ってください。それが私たちの父なる神様である。

私たちが、神様と(父と子の関係)に入れられていれば、「子よ、愛するかわいい子よ」と神様からの愛の呼びかけを、全存在で受け取っているところにあるなら、私たちは、神様の子として、神様のものを全部、自分のものとしていく、そういう身分を持っている。だからロマ書8章32節でこう言われている。

私たちすべてのために、  
ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、  
どうして、  
御子といっしょにすべてのものを、  
私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

(ロマ8:32)